

神宮壁畫館問題

黒田清輝

明治大帝の御偉業をたゞ繪にして殘すだけだと當局は考へてゐるかも知れないがこの壁畫館が永久に残るとすれば後世の人はこれが明治大正の代表的美術館だと思ひ歐米諸國でもこれが日本の代表的美術と考へるであらう、かく考へる時は現在奉贊會の當事者が藝術に對して何の理解もなくこの大事業を安直に片づけやうとして居るのを見ればお互に拱手傍觀して居るに忍びない、殊に日本の美術行政の責任團體である帝國美術院を代表する自分としては遺憾至極と考へて居るが今日までこの議を進めて來るのに奉贊會の當事者はたゞの一回も美術院に相談もしなければまた美術家に對しても意見らしいものを徴したことも聞かない、殆ど藤波言忠子が 先帝陛下の御寵遇を賜ひ其御事蹟に詳しいといふので子爵が四五年もかゝつて五姓田畫伯を指圖して下繪を描かせたもので其の下繪によつて南畫家よし四條派土佐ござれ洋畫家よしで恰で藝術の立場を没却して描かせやうとして居る、全く困つた事だが先方から一言の相談もかけられぬのに如何に帝國美術院としても容喙するのを好まない、自分個人として奉贊會の當局からは適當な洋畫家を推薦して呉れとは依頼されて居るが自負心の高い一流畫家は今のやうな没藝術的な制度の下では筆とるのをいさぎよしとしないであらうし自分としても推薦するのを好まない、せめて引き受けた美術家だけで一團となつて其の仲間だけで各々其の技倆と其の畫風に適する場面をお互に推舉し合つて描くとかすればまだ多少活路を得るであらう、奉贊會の當事者も心ある連中は眉をひそめて居るらしいが

現在でも若し胸襟を開いて帝國美術院の方に相談かけられ、ば我々は明治大帝の御偉徳を記念する上に於いてまた日本の美術界の爲めに喜んで奔走することが出来やう。(報知)

『美術之日本』二五三 大正二二年三月

明治天皇の業績を壁画により讃える絵画館はその崩御直後より構想され、大正八年には建造物が着工、同一年には全八十題からなる画題が決定した。しかしその揮毫者人選の段階で川合玉堂・横山大観・下村観山ら日本画家による壁画計画への反対運動が生じ、世間の注目を集めた。本文献はその時期に藤井浩祐・川端龍子・山本鼎の論説とともに『美術之日本』に掲載されたものである。